

教会暦

知っておきたいキリスト教のことは (55)

教会暦とは、イエス・キリストに起こった重要な出来事を毎年思い起こすために用いる、教会特有の暦です。

降誕日(クリスマス)は毎年12月25日と固定されており、この日はイエス様が生まれたことを記念する日です。

しかし復活日(イースター)は、春分の日次の満月の直後に来る日曜日と定められています。さら

に聖霊降臨日は、その復活日の50日後です。したがってこの二つの祝日は、毎年変動する、いわゆる移動祝日となります。

これら三つの祝日(降誕日・復活日・聖霊降臨日)の他にも、聖公会やカトリック、ルーテル教会などでは、その日がどのような期節であるか決められています。

例えば11月30日に一番近い日曜日を降臨節第1主日と呼び、その日から降誕日までの期間を「降臨節(アドベント)」と呼びます。そして降誕日から1月6日の顕現日までが「降誕節」です。ちなみにクリスマス飾りは、降臨節第1主日から顕現日まで飾るのが正式です。

また、復活日の46日前を「大斎始日(灰の水曜日)」と呼びます。そしてこの日から、イエス様の十字架の苦難をしのぶ「大斎節」に入ります。なお「降臨節」と「大斎節」には、「待望」や「悔い改め」を意味する紫の祭色が用いられ、礼拝堂には花も飾られません。

他にも細かく決められていますが、ではどうして聖公会は「教会暦」を大切にしているのでしょうか。それはイエス様の生涯を毎年迎えることによって、神さまはなぜイエス様をわたしたちの間に生まれさせ、どうして十字架に向かわせ、復活させられたのかを想起するためです。イエス様の出来事を昔話ではなく、今、わたしたちの間でも起こっていることだと覚えるのです。

次回は「共観福音書」です。お楽しみに。

